

16

木の杜通信

平成 23 年 6 月 17 日発行



特殊伐採の仕事を通して思うこと。

ある空師の大先輩から言われた言葉が印象に残っている。

「木はしっかりと澤田君の仕事ぶりを見とるぞ」

木は、いったいどういう人間なのか、心のうちも見透かしたうえで観察している。

言われてドキつとしたのも事実だった。チェーンソーを持てばどうしても優位な立場で木々を管理している、そんな感覚になりがちだが、いわんやそれは錯覚にすぎず、むしろ逆に人間の方が試されているのかもしれない。木々の精霊、あるいはなにか大きな存在に…。

木というのは喋らないし、直接的反応を示すこともない。伐られて痛いということもない。それがため、すべては人間次第、その人物の思惑、オモイ次第ということになる。

翻って、木を伐るという行為は人間を極めた人間だけに許されるべきことなのかもしれない。すなわち木々に携わる仕事をする人は、素養や教養が必要だし、奢った態度というのとはもってほか。思いやりがあつて雲ひとつない青空のように澄んだ心の持ち主でないといけないのだろう。はたして自分がそういう木々に認められる資質を持ちえているかといえども縦に首は振れず、今後精進していくしかないかと思う。

「愛情を持って、木のことを想って仕事を尽くせば木の方がそれに応えてくれる」

木は地に根っこを張って地下で他の植物と繋がっている。

「すでに伐った木から澤田君がどういう人間かっていう情報は他の樹に伝達されとるかもしれないぞ」

——さあどうする？今後どうやって木々と関わっていくか…。今、自分はそのことを問われているのではないか。

(澤田和弘)

澤田和弘 (30)

sawada kazuhito



平成 22 年度より木の杜学舎の活動に参加。岐阜市でぶどう栽培を軌道に乗せつつ、特殊伐採事業「恵風舎」を立上げ、特殊技術を使った伐採を始める。木の杜学舎の伐採事業にも欠かさない人材となっている。今年結婚し、ますます人物に磨きがかかる。写真は美濃市小倉公園の伐採事業で。

【恵風舎ブログ】

<http://keifusya.web.fc2.com/>

「森」プロジェクト

杣の杜学舎が片知区山林の作業・計画を請け負う

杣の杜学舎では、片知川源流部にあたる片知区の所有山林の整備を請負い、平成二三年度から段階的に整備を進めます。当山林は昭和四五年から国有林と分収契約されていましたが、昨年、五〇年の契約期限で契約を解除しました。

地元では皆伐を避けて長期的な視野を持って管理していきたいと希望しており、立木のまま買取りました。

この契約解除によって約二〇分の針葉樹人工林管理の課題が浮かび上がったため、今後の施業指針作成を含めた長期的な施業を杣の杜学舎で受託しました。

官民学連携を展望

この山林に隣接する美濃市有林と下牧財産区有林も同様に国有林との分収契約の契約期限が迫っています。片知川源流部一帯が分収契約の針葉樹一斉林であり、契約解除後の管理をどうするかという課題は片知区山林のみにとどまりません。

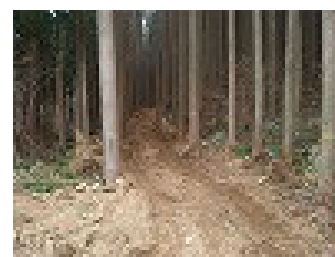
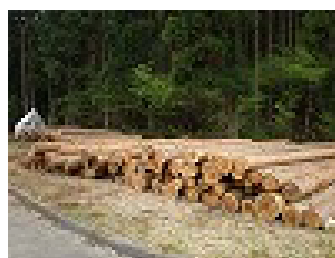
状況の進展を受け、美濃市と下牧財産区も契約解除による買取りを計画しています。この区域は、標高約一〇〇〇mの瓢ヶ岳や高賀山の登山や片知溪谷のハイキング、ボルダリング（岩登り）やツーリング（自転車）など余暇に訪れる人も多く、美濃市はここを継続的に整備してきています。

地元と美濃市は片知川源流部を「水源の森」とし、森林資源を守り、市民の憩いの場となるよう一体的に整備を進めます。

杣の杜学舎は森林文化アカデミーとも協力し、官民学連携によってこの課題に地元とともに長期的に取り組んでいく構えです。

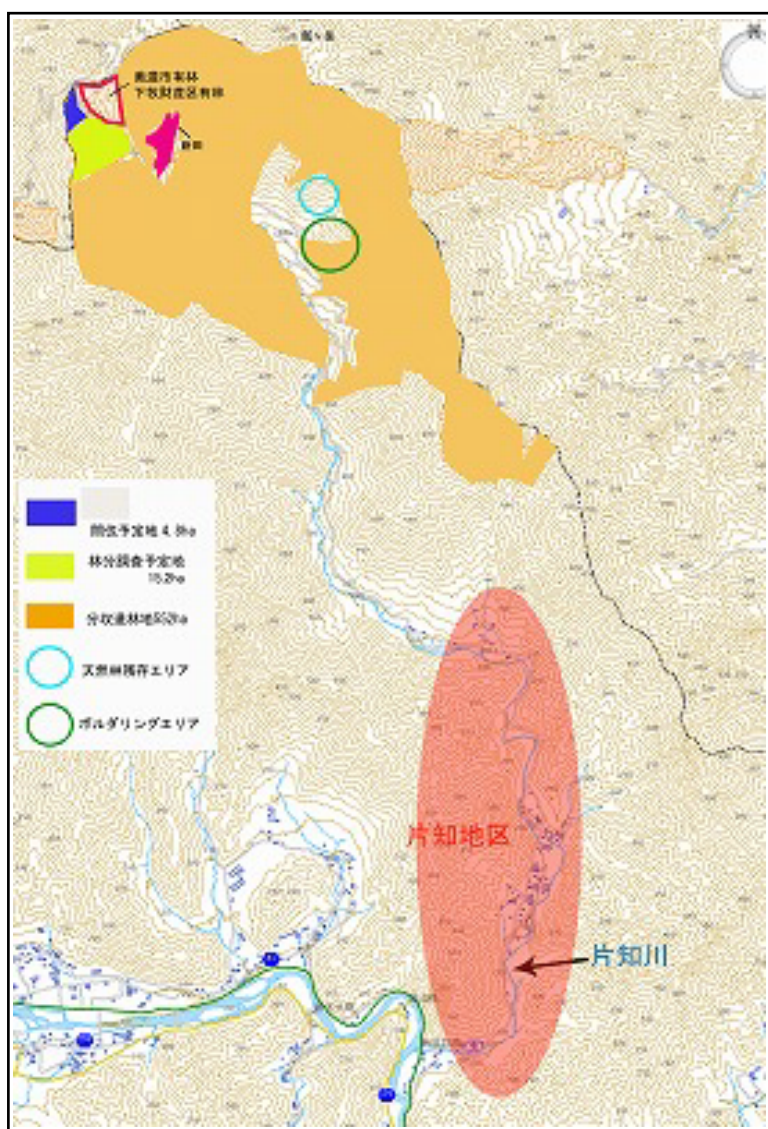
森林を「地域の宝」に

「モデル林づくり」と地元研修会



(上) 搬出した材 (中) 開設中の作業道
(下) ユンボで切削する鈴木代表

杣の杜学舎では、農林中金八〇周年森林再生基金（FRONTIS）を取得し、「美濃市ふくべの森入会林野再生モデル事業」として平成二三年度中に二〇分のうち五分の間伐と搬出、八〇〇mの作業道開設、一五分の調査を行い、水源林モデルをつくります。



「水源の森」プロジェクトエリアの位置

片知川源流で「水源の

地域が主体となって管理を担っていきけるように、地元で研修会や勉強会を行います。また、事業の一環として、山林資料の整理も行います。

「ふくべの森の勉強会」を開催

五月二二日「ふくべの森の勉強会」へ森を地域の財産に・片知川源流の森を知るを開催しました。八六名（うち地元参加者三〇名）の参加で会場の地元集会場がいっぱいになりました。

まず、蔵治光一郎氏に森と水の関係について、専門家として最新の科学的見地をわかりやすく披露していただき、次に、丹羽健司氏に現在全国で展開中の地元所有者による森林利用「木の駅プロジェクト」について、現場の雰囲気まで伝わる報告をしていただきました。その後、原島幹典氏をコーディネーターとして会場で意見交換を行いました。

参加者からは、「水の平準化と蒸発あり、森林が育てば水減ること、わかりやすい」「先生方の講演良く理解できた。意見交換の意欲ある質問と先生の有意義な回答」「素晴らしい先生方にこんな田舎に来ていただき感謝感謝」「『誰かがやる』から『自分もやる』になれるかもと思わせてもらった」「片知の森に住む動物・植物の詳細な調査が必要では？」「この片知に人々が働けるようになると良いと思います。」「産まれ育ったこの地が大好き。美しい森や川が長く残り地域の方の生活がより活性化していけたらと思った」などの感想が寄せられ、刺激的で有意義な会となりました。

午後からは雨の合間を縫って、現地の見学に向かうことができ、参加者のうち五〇名程度がこの

プロジェクトの現場を歩きました。

大型機械で小面積皆伐を行っている箇所と小規模作業道と小型機械で間伐を行っている両カ所を見学し、その対比も参加者には興味深く受け止められたようでした。

年五回の地元研修会を開催中

地元の森林管理の担い手を育成するために、勉強会に引き続き研修会を行っていきます。

第一回は森林調査「森の健康診断」。第二回は「選木・チェーンソー講習・伐採」。第三回は「伐採・搬出」。第四回は「搬出・薪づくり」。第五回に「森の利用・活用を皆で考えよう」と題して行い、研修者は、ほぼ毎月一回、当プロジェクト山林に入ります。

第一回は六月四日に開催しました。稲垣久義氏他矢作川水系森林ボランティア協議会から講師を招き、四班に分かれて「森の健康診断」を行いました。研修者は二〇名を予定していましたが、片知区住民で二二名、片知区外から一名の参加があり、普段は人をあまり見ない山に歓声が響きました。地元参加者の中には、はじめは付き合いで仕方なくという人もありましたが、午後には非常になごやかな晴れ晴れしい雰囲気で終了しました。丸一日山に入る日程は地元にとっては負担であることは承知の上ですが、充実した研修内容としてと考えてあえて五回・丸一日で一巡する内容としました。

会を重ねるごとに参加者に山の楽しさを実感してもらえよう工夫をするつもりです。その結果、地元で管理の主体となるグループ形成を促す

ことがこの事業の狙いです。

（寺田菜穂子）



「入会林野の再生」とは…

片知区の最上流集落である板山集落は、炭焼きと紙漉きを主業としていましたが、燃料転換期の昭和三十六年に国有林と分収造林契約を締結し、住民は炭焼きから植栽・保育に転業しました。植栽した木の保育が一段落すると、地元で山に入る人も少なくなっていく、実質的な入会権も消滅しました。

「入会林野の再生」とは、地域住民みなで利用する仕組みを復活するという意味で名づけました。

第1回研修会の様子



あるべき日本の未来風景とは 2

皆様、お久しぶりです。そまっぶ一四号のこのコラムで“次号に続く”としたコラムの続きを二年半ぶりに書かせていただきます。

前回は、二一世紀に入り、日本の風景がどこも、かつてSFで描かれていた様な未来都市の風景にはならず、田舎は勿論、都市郊外には昔ながらの里山風景が残っている話でした。そしてその里山が危機に瀕していることも。人の手が入ることによって景観も生態系も維持されてきた日本の里山。人間の生活様式の劇的な変化によって、里山が消滅しつつあります。耕作放棄や様々な開発によることもありますが、木を伐って利用するということが、かつてに比べ極端に減ってしまったことが根本にあると思います。その象徴ともいえるのが、岐阜県をはじめ、日本の各地で起こっている“ナラ枯れ”の問題です。ナラ枯れはナラやシイ、カシ類にカシノナガキクイムシという昆虫が大量発生して枯らしてしまうものです。特に大きくなった古木に発生しやすいと聞きます。かつては薪炭林として10～15年周期で伐られていたものが、伐って利用されず、木がそのまま大きく育つうちに発生しやすい環境ができてしまった為、起きている現象ではないのでしょうか。日本人の生活様式の変化がもたらした現象ともいえます。ある意味自然の流れなのかもしれない

せん。

しかし、このまま森に人が入らず、木が伐られることない状態が続けば、里山は荒れていってしまうでしょう。それも“自然の”流れであると言ってしまうえばそれまでですが、放置しておけば、日本の気候風土の元では日本の多くの森が常緑樹の森に遷移していくはずで、落葉樹から常緑樹の森に変わっていくことは森の環境が大きく変化することです。何百年、何千年も人が山に入り、木を伐って利用してきたことによって形成された生態系にも影響が及ぶと思います。今まで生息できたのに環境が変化することにより絶滅する生物が増えることになるかもしれません。折りしも、昨年、名古屋市で生物多様性条約に関する締約国会議（COP10）が開催され、里山の重要性が改めて注目されておりました。数多くの生物が生息できる日本の里山。里山の消滅は多くの種の絶滅も招きます。それは人間にとっても不利益を被ることでしょう。生物の資源的価値もありますが、地球上の生物同士はお互いに何らかの影響を合せて、生き続けています。人間もその中で生きており、種の絶滅はいずれ人間にも何かしら影響が出てくると思われる。今後、消滅しつつある里山を維持、あるいは復元していくにはどうしたらよいでしょうか？現在、様々な地域で里山を守る団体が活動されています。私の住む岐阜県美濃市でも3年前から美濃市森林ボランティアクラブが発足し、美濃市内の里山の景観維持等を目的に森林整備を行っております。これらの活動も重要ですが、根本的には木を伐って利用するというかつて生活の中で行っていたことが必要な気がします。しかし、昔の生活様式に

戻るのは現実的ではないので、現在の技術と絡めた新たな里山利用が求められると思います。例えば現在の生活に電気は不可欠となっておりますので、発電をバイオマスで行うとか、暖房を薪やペレットストーブで行うとか新しいスタイルの木の利用が考えられます。特に東日本大震災に伴う原発事故により原子力発電が疑問視されていますので、自然エネルギーへの転換が注目されています。里山から得られるものが出てこれば、里山の風景も維持されていくことでしょう。やはり人は“利”がないと動かない、あるいは継続的な活動になつていけないのではないかと思うのです。利とは経済的利益だけではなく、精神的なものも含めて広い意味での利という意味です。今後、私も仕事やボランティア活動を通じて、里山の景観維持の為に知恵を絞り、里山の恵みの利用を考えていきたいと思っています。（山中 亘）

おススメ本

「サルが畑を荒らすのは山に食べるものがなくなったから」と言う人がいるが、この本はそれを全面的に否定している。



研究者が長年の研究成果を元に、猿害の原因から実際に使われている防除法の効果まで分析している。里山暮らしをはじめようという人必見！（寺田）

【事業報告】二〇一〇年度

●間伐事業

美濃市片知地区を中心に約二七畝の間伐を完了しました。二〇一一度前期に約二〇畝の切り捨て間伐を予定しています。

今後は、事業地を片知ふくべの森の集約化計画事業地を中心に、作業道の開設や利用間伐を手がけていく予定です。



作業道開設中のふくべの森事業地

●片知溪谷景観整備事業

美濃市片知の片知溪谷遊歩道の再整備と林道中美濃線沿線の除伐・除草作業を実施しました。

遊歩道の管理が不十分であったために、敷化した箇所や、腐朽化で危険な階段、橋などの補修をしました。また、徐伐により快適な森林散策ができる



遊歩道の補修作業

空間に再整備しました。

尚、この整備は、片知地区の地域の皆さんや美濃市森林ボランティアクラブのメンバーの皆さんの協力を得て実施しました。

●観光施設環境整備事業

(小倉公園・美濃和紙の会館)

小倉公園、美濃和紙の会館、観光ふれあい広場周辺の除草作業・景観整備作業を実施しました。

美濃和紙の会館の隣の広い芝生広場の芝刈り作業は、結構大変な作業でした。また、駐車場周辺の支障木の選定作業を実施しました。

ところで皆さん、美濃和紙の会館の中に入ったことありますか。実は私、入ったことありません。(入場料いりますもんね。)喫茶店はたまに利用します。

尚、この整備は、片知地区の地域の皆さんや美濃市森林ボランティアクラブ、森林文化アカデミーの学生の皆さんの協力を得て実施しました。



美濃和紙の会館周辺の整備

●小倉山環境整備事業

(美濃地区地域づくり委員会受託事業)

昨年に引き続き、美濃地区地域づくり委員会からの委託で、小倉公園の景観整備を実施しました。

今年度は、芝生広場の「村瀬藤城彰功の碑」周辺のナラ枯れの被害にあったシイの木などの伐採作業を中心に実施しました。スタッフの澤



クライミングロープを使った高所作業をする

田氏が、欧米式クライミング技術を使った樹上作業で、安全にかつ正確に作業を進めました。暗くて危険で立ち入ることさえ躊躇するようなエリアが明るく蘇りました。

是非、お立ち寄りください。

●森林景観整備実態調査及び整備計画書作成委託業務(鶴形山周辺)

美濃市からの委託で、鶴形山周辺の景観整備実態調査を実施しました。鶴形山は美濃市の北端に位置し、洲原神社の御山として保護されています。標高348mで、暖地性の植物が多くみられ、ここが北限と思われるものもある多くあります。登山道は整備されていますが、国道と登山道が長良川鉄道の線路で分断されているため、登山道へのアプローチが分りにくいのが難点でした。

● 絆の森整備事業

(遊歩道・森林整備に係わる業務)

スギ・ヒノキの人工林の多いふくべの森の中に、比較的平坦な地形の広葉樹の二次林があります。地元で「新田」と呼ばれているこのエリアは、かつては新田開発によって開墾された耕作地の後で、二〇年ほど前に一時期シキミを植栽して出荷していたこともあります。現在はシキミ栽培も放棄され、藪化が進行していました。



森づくり活動の拠点として活用する作業小屋

この場所を、市民に開放して森林に係る様々な活動に利用しようということで、今回、歩道の整備と除伐を実施し、人と野生生物の共生環境を整備する作業を行いました。既存の作業小屋は、今後、市民参加の森づくりフイールドの拠点として活用される予定です。

● 「美濃市ふくべの森入会林野再生モデル事業」が農林中金八〇周年森林再生基金 (FRONT80) 事業に採択

ここ数年間、ライフワークとして取り組んできた地元である片知地区の分収造林地の契約終期による皆伐回避と今後の管理の問題を、「美濃市ふくべの森入会林野再生モデル事業」として、新スタッフで施業プランナー

である寺田菜穂子が事業計画を作成して農林中金森林再生基金事業 (FRONT80) に応募しました。

全国から二四件の応募があり、公益性・創造性の観点から六事業が採択され、そのひとつに、「美濃市ふくべの森入会林野再生モデル事業」が採択されました。

事業地は、美濃市片知地区の水源地の源流部に位置し、官行造林地として管理されてきた森林です。分収契約期限の到来を機に、皆伐を回避するため地域住民が立木を買収したものの、地元には森林管理の知識と技術を持った人材が減り、共有林管理の再構築が課題となっています。

当事業では、地域住民とともに森林整備のモデル林を設置し、地域住民による共有林管理体制の再構築を目指すという取組みが評価されました。

(鈴木 章)

【編集後記】

子供が七ヶ月になりました。岐阜市から片知に引越えし、隣のおばあちゃんに山椒やわさびを根っこごともらったり、お茶に誘ってもらって広い座敷で子供を遊ばせたりと田舎生活を満喫しています。山の恵みの中での子育てが楽しみです。(寺田)

杣の杜学舎 収支報告 (平成20年度～平成22年度)					
	平成20年度		平成21年度		平成22年度
	金額		金額		金額
I 経常収入の部					
1 会費・入会金収入	107,000		120,000		90,000
2 事業収入	14,058,191		10,815,499		17,564,378
3 補助金・助成金収入	57,000		24,000		0
4 寄付金収入	0		10,000		0
5 その他収入	118,198		64,661		17,173
当期経常収入合計		14,340,389		11,034,160	17,671,551
II 経常支出の部					
1 事業費	10,348,980		7,201,762		12,994,092
2 管理費	3,825,734		3,686,134		3,828,241
当期経常支出合計		14,174,714		10,887,896	16,822,333
当期経常収支差額		165,675		146,264	848,218
III 当期経常外収入	4,000,000		2,350,000		3,900,000
IV 当期経常外支出	5,291,383		5,302,999		1,522,170
当期経常外収支差額		-1,291,383		-2,952,999	2,377,830
当期収支差額		-1,125,708		-2,806,735	3,226,048
前期繰越収支差額	5,837,675		4,711,967		1,905,232
次期繰越収支差額		4,711,967		1,905,232	5,131,280
V 正味財産の部					
正味財産増加の部	0		0		122,170
正味財産減少の部	-1,175,463		-2,818,401		2,500,000
正味財産収支差額		1,175,463		2,818,401	-2,425,418
当期正味財産増加額	49,755		11,666		800,630
前期正味財産	2,618,981		2,668,736		2,680,402
正味財産の額		2,668,736		2,680,402	3,481,032
主な事業	間伐事業		間伐事業		間伐事業
	以安寺山景観形成整備工事		市内竹林・山林等景観整備事業		絆の森整備工事
	インタープリター事業		岩陰遺跡・ふくべの森整備事業		片知溪谷景観整備事業
	薪通販事業		小倉山環境整備事業		小倉公園支障木伐採事業